

四

私が四歳になつた時に、私は或る代用學校に送られた。スザンナ先生——老嬢で、身丈と云へば男の様に高く懐かしげな青眼は青黒い顔に一つの光明の様に輝いてゐる——が此處の校長であつた。我々子供達は廣い客室に這入つた、これが教室にあてられてゐるので、やゝ暗く、一方の側には男の子、他方には女の子が壁のまわりにグルリと坐るのであつた。眞中にはスザンナ先生の机、ギツチリと教科書が載つてゐる。先生はここに席を占めて、白い陶器製の煙管を口に啣へ、また一碗の茶をすゝる。机の後の膝掛椅子の時代のものであるのが、何となく尊敬心を吹き込む。先生の前には長い定規があるが、之は線を引くために使ふのではなくつて、我々腕白者が、先生が顔を顰めたり咳拂ひしたりする位では、もはや制禦しきれなくなつた場合に我々を罰するた

めに使ふのである。定規の傍には乾葡萄の入つた紙箱がある、これは非常な善い事をした時の褒美の品であるが、實際は定規でピシヤリと打つ方が乾葡萄を呉れる事よりもズツト規則正しく行はれた。否スザンナ先生はまことに乾葡萄を儉約して使ひなすつた。その時に時々この箱は空虚になつた所から、我々のかのcantの無上命令法(註、人の性は善であつて利良心が具はつてゐるとの意)を非常に早くから悟つた譯である。

大きい子も小さい子も机に向つてゐて、次々に先生から呼び附けられ、前方に進み出た生徒は書き方の授業を受け、後列の方は讀章を暗誦する、そして場合に應じて、或はかの定規で指を打たれ、或は乾葡萄の褒美にあづかる。またこの學校には一人不親切な下女が居た。よく處罰の役目に餘計な世話を焼いたり、のみならず教室を出たり這入つたりする。また時に年少の生徒がお粗忽をしてこの女中にとんだ世話をかける事もあるが、この下女は鋭い眼をして、子供達が持つて來たお菓子や、餘り澤山に、食

べはせぬかをよく監視してゐた。

この家の後側に小さな庭があり、スザンナの小花壇につゞいてゐた。庭では放課時間に我々は遊ぶ事は出来たが、花壇の方は全く這入る事は出来なかつた。此處には澤山の花があつた、あの珍しい花の姿の蒸し暑い夏風に揺めく様子が今だに私の眼の前に浮んで来る。スザンナ先生は機嫌のいゝ時には、折々この花壇の花を摘んで私達に呉れるが、それも花がもう萎むと云ふその時で、それより早くこの園の裝飾を奪ふ様な事は決してなかつた。花壇は小ザツバリとしつらへ入念に手入されてゐて、其間あいだにはごく細い道、やつと鳥がピョイ／＼飛ぶ事が出来る位の道がついてゐた。

スザンナ先生は子供に物を呉れる時に兎に角非常に不公平な分配の仕方をなさつた。有福な家の子はよい贈物を受けるし、又高慢な願も大威張りて云へるし、又云つても、たしなめられる事もなしに濟々貧乏人の子供は残り物を貰つても不平は云へなかつたし、また斯ういふ子供達はどんなものでもこの先生のこの恩恵をだまつて待たなければ全く外に貰ふ道はなかつたのである。

この不公平はクリスマス前夜には最も露骨に顯はれた。この時には澤山の菓子や堅果の分配があるが、しかし、この際の福音書(聖書)の中にある「有ては與へられる」と云ふ言葉が最も忠實に守られるのである。教會區(註、一つの町の家を幾つか)の書記の娘とか、権力のある尊重される人とか、醫者の息子達などは、菓子の半打やハンケチ一杯の堅果を貰ふ。之に反して貧乏人の餓鬼共のこの聖夜に於ける貰へる見込と云ふものは専らスザンナ先生の恩恵の手にかゝつて居るのであるが、誠に乏しく片附けられてしまふのであつた。この理由はスザンナ先生が返禮の送物を豫期するからで——蓋し亦、あてにせざるを得ないのだが——大骨折でやつと月謝を納める事が出来る様な人達からは返禮など思ひもよらぬ事であつたから。

私は全然排斥されもしなかつた、と云ふのは、秋になれば、ちやんと定まつて我家の梨の樹からスザンナ先生へ貢物が献せられたから。そしてまた私は、さなきだに多くの子供にくらべて、「頭がいい」(スザンナ先生が曰ふ事だが)と云ふ譯で優遇されはしたが、然しながら、私は差別と云ふ事をつくづく感じ

た。またこの學校の女中の爲め苦しめられねばならなかつた、それはこの女中が、私が無邪氣にする事を惡意に解釋する、例へば私がうつかりハンカチを擴げてゐると、あれはハンカチ一杯何か貰ひたい印だ」ととる、かう解釋されると私は頬が灼ける計りに恥しい氣持になり、眼には涙が一杯になるのであつた。

スザンナ先生の不公平と、下女の不都合な行とを私が意識するや否や、私は幼年時代の不思議な樂園を通り過ぎてしまつた。こは極めて早い時期に起つた事であつた。

五

然しながら、今や私は此のスザンナの學校に居つた幼年時代に二つの要點に觸れた事を目前に顯然と思ひ出す。

先づ第一に私は、自然及眼に見えざるもの——豫覺に富んだ人は自然の背後には神ありと想像するが——から最初の恐しき印象を受けたのであつた。

子供には斯う示ふ時期がある、(この時期は可成永く續くものであるが) 即ちこの世界は兩親の手に、

殊にも何となく幾時も黒幕に立つて居て神秘に充ちてゐる父親の手に、委ねられて居るものと信ずる。そしてまた兩親に玩具をねだれば直ぐに貰える様によいお天氣が欲しいと云へばそうして呉れる力があるものと思つてゐる。しかし、この時期も勿論終りが来る。即ち、子供が、自分達に罰が有難くないと思ひながらも之は子供だからどうにも避けられぬと思つてゐると、兩親にもまた、どうする事も出来ない嫌な事が起つて來る事を知る様になる。と同時に兩親の神聖なる頭を取りまいてゐると思つて居た一種神秘的の魔力の大部分はこの時除かれてしまふ、即ちこの尊敬する時期が過ぎ去ると此處に人間本來の獨立心が初まつて來るのである。私がこの期に目覺めたのは暴風雨の日の事で、この日は雷鳴、降雹をともなつて誠に恐しい日であつた。

ある蒸し暑き夏の日の午後、地面は軋び割れ、あらゆる生物は焼き焦がされる様な日であつた。私達子共は物倦く、壓しつけられる様な氣分で、或は問答書を或は入門書を手にしながら、ちらばらと彼方此方のベンチに腰掛けて居つた。スザンナ先生はコクッ〜とねぼけ眼で船を漕いでゐるので、我々の

悪戯をまことに寛大に見逃した。悪戯でもしなければ到底私達は眼を覺ましてはゐられない。全く蠅さへも羽音をたてない。尤も極く小さい虫は飛んでゐた、いや實際、小さい奴はどんな時にも元氣のよいものである。

時しも俄かに雷鳴が轟き渡つた。古き住み荒されたこの家の虫喰つた桁がドシンと音がしてガタ／＼と後鳴りがする。今や恰も北國に起る嵐の様に凄しき雹まぢりの風となり、一分と經たぬ間に風に面したあらゆる窓を粉碎してしまつた。その直ぐ後で、否、それとまぎつて豪雨が降つて來て、今にもノアの大洪水を引き起すかと思はれた。

我々子供は驚いて飛び上り、呼び喚いて上を下へと走りまはる。スザンナ先生御自身はのぼせ上つてしまつて、もう役に立たない時分になつて漸く、女中に命じて雨戸を締めさせる、いや役に立たなかつた計りでなく、既に水が室に這入り込んでしまつてゐるので、その大氾濫の上に一層の恐怖を高め、また物を打壊はすやら大混雜、その上に眞にエジプト的の眞暗闇(註、舊約聖書出埃及記中にあり、モーセがイスラエルの民を率いてエジプトを出づる時に起りし事)を引し起したわけであつた。

しかも、一つ雷鳴と次の雷鳴とのその間に、スザンナ先生は辛うじて我に返つて、子供達を見廻ると子供達は年齢相應に或は先生の前掛にブラ下り、或は自分で眼を閉ぢて隅の方にうづくまつてゐる。先生は力の及ぶ限り或は慰め勵まし或はなだめる。所がまた急に青い焰の様な光が雨戸の隙からピカリと來ると、出かかつた言葉が先生の唇の所で死んでしまふ。その間にかの女中は殆ど赤坊の様にひどく怖がつて「ア、神様のご立腹だ……」と云つて泣き出す。また電光が消えて室内がもとの暗闇になると、先生は教育的の口調で「ズツ／＼呟きながら附け加へて曰く、お前達は全く何の役にも立ちほしくない」と。この言葉は、よしそれが先生の不機嫌から出た言葉であつたとしても、私には實に深い印象を與へた。即ち私は私自身に對し、また、私を取巻く種々のものに對して、目に見える以上のものを仰ぎ見て、こゝに宗教的の閃きに火を點じたのであつた。

扱學校から自分の家に歸つて見ると、こゝにも亦破壊の暴行が行はれてゐた。庭の梨の木は熟りかけたその實がたゞき落された計りか、葉が皆なくなつてしまつて丁度冬時の様になつて立つてゐる。

また非常によく實の熟る梅の木、その實は家の者ばかりでなく、この町の家の半分また可成に廣く散在してゐる知己にまで分け與へるのを常として居つたのだが、この木が夥しく技を失つて、丁度腕をなくした不具者の様になつてしまつた。未熟のままに實が落ちたので、母には、飼つてゐる豚が向一週間御馳走があつて善いと云ふ事で、せめてもの慰めになつたが、私は全くつまらなかつた。唯、澤山其邊にある硝子の破片をとつて、世にも一番容易い方法で濕つた土を裏面に擦りつけて最上の鏡を造り、これでせめて取返しにつかない秋の喜び（果實の取入れ）の補償にと思つた。

しかし此時から私は、何故父がいつも日曜日に教會へ行くのか、何故私はザツバリと洗つたシャツに手を通す時に「神よ守らせ給へ」と云はなくてはいけないのか、と云ふ事が解つた。私は萬物の主の主なるものを知つた、その主の憤怒せる僕、即ち雷とか電光とか、霞とか嵐とか云ふものが私の心の入口を押し開き神が非常な力で私の心の中に乗り込んで來た。其後間もなく、私は、或は風がひどく煙突から吹き込む晩、或は雨がバタ／＼と屋根をうつ夜、

私が寢床に入れられてゐるその時に、これ迄私がたゞ唇で器械的に覺えた喋々べくべくが突然、赤心からの不安のための祈禱に變ると云ふ内的變化を來す様になつた。こゝに於て、是迄分け兩親に結びついてゐた私の精神的の臍緒が裁ち切られたのみならず、間もなく私は、私が兩親から悪く取扱かはれたと信ずる場合には、父や母の事を神に訴へ始めると云ふ所まで進んで行つた。

更に此のスザンナの學校にある間私は最初の、恐らくは最もにがき苦行をしたのであつた。今私が云はうとするこの事を明らかにするためには私は詳しく述べなければならぬ。

ごく小さい子供達の學校に於ても、後年大人になつてからこの世で一層濃厚な度合に於て出會ふ様なさう云ふ種々の要素が、既に備はつて居るのである。殘忍性、狡猾、下等なる智慧、偽善などは皆既に代表される、そして偶々純なる心情は、丁度、かの野獸の中に立つアダムとイヴの畫の様で誠に倚りない姿である。この性質の中のどれ丈を生れ付きとすべきか、どれだけを最初の教育に、或は家庭が教育を

等閑にしたと云ふ事に歸すべきか、此の問題は此處には決定せずに置かう。が、事實は疑ふ餘地がないこれはまた私の生地、ウエッセルブローレンに於ても事實であつた。

鳥を生きた儘で毛を抜いたり、蠅の足をもぎ取つたりする亂暴な男の兒より、入門書の中から其處に挿んである五色の不審紙を盗む本式の不良少年に到る迄、あらゆる種類のものがこの學校に居る。少し人が善くて、そのため虐められる様に呪はれた學友達が、その惡友が何か惡戯や隱謀の種になる様な事をする(例へば虚言つくど泥棒になるよ、などい云ふ)と怒りの餘り時々豫言する、するとその豫言した運命が、かゝる惡友の一人ならず多くの者に、文字通りに實現して來るのであつたこのやくざ者(不良少年)は、いつも、またそれ丈に誰にその螫を最初に又一番鈍く突き込むかを知ると云ふ本能がある、さればこそ私の様に見込まれた者は一番長くひどく虐められたわけである。

或る時は彼(不良少年)は如何にも熱心に問答書を読んでゐる様な風をして、本をピツタリト顔につけ紙越しに、實に聞くに堪えない種々の事を耳語し、また私に問ふて曰く「君は、子供と云ふものは井戸か

ら出て來て、鴻の鳥がそれをくはへて來たなどと云ふ事を本氣で聞く程そんなに馬鹿なのか」と。

また或る時は他の子が私に呼びかける「君、林檎が欲しいだろう、欲しけりや僕のポケットから取つて行き給へ、僕、君の分も持つて來たから。」と。そこで私が一つ貰ふと、彼は「スザンナ先生！僕は盗まれました！」と叫ぶ。そしてたつた今云つた言葉を否定する。

また或時は、本に唾を吐きかけるのみならず、直ぐにオイ／＼泣き出して、厚顔にも私がそれをしたのだと主張する。

かうした惡戯に私は殆ど一人で身をまかせた。と云ふのは一面には私がこれをムキになつて受取つたのと、また一面には私が大變に無邪氣なために私にする惡戯は、いつも成功したからであつた。そこで惡戯と云ふ惡戯を、私は實に例外なしに甘んじて受けなければならなかつた。

その上にこの學校には、また背のヒヨロ高いよく虚偽をつく不良少年が二三人は居た。彼等は私などよりは遙かに年取つてゐるのに、それでもまだA B Cの級(下級)に居たが、時々學校をヌカレ休みをす

る。彼等はヌカレ休みをしたために二倍も三倍も退屈する計りだが、さりとて家に歸るわけにも行かぬ、又遊び仲間は皆學校に行つて居らぬし、誰もかまひつけぬ、そこで或は垣根の後に隠れ、或は涸れ切つた水壕の中で待ち伏せする。遂に放課の鐘が鳴ると彼等は居るべき所に居つた様な顔をして、學校歸りの我々に混つて家に歸つて行く。

然し、彼等はこの日の埋め合せをせずには置かない、誠に念の入つた後續きのする悪戯を考へる。即ち翌日學校へ來ると、前日のその冒険を私達に報告する。思ひがけず父がすぐ側を通つた。よく僕を嚇つけるあのスペイン製の籐ステッキを手にもつてサでもとうとう見付けずに行つてしまつたよ」とか「母がスピッツ(犬の名)をつれて壕の所へ來た、犬の奴め僕をとうとう嗅き出したものだから見つかつてしまつたサ、しかしね、『スザンナ先生から云ひつかつてカミレッツ草の花を摘みに來たんです』とうまく虚言をついてのがれたのサ」などと彼等は胸つき出して、恰も古參兵が新兵にその手柄話をするかの様に物語る。扱彼等は最後にかう云ふ教訓をする、「僕等はヌカレ休みをするのは實に鞭やステッキに對して

の大冒険なのだ、君等はしたつて、たか／＼細い鞭で一寸觸はれる位のものぢやないか、それのに君等は臆病で、冒険しないんだねえ」と。この話がまる／＼虚言でないだけに、一層我々には心外であつたまた此時一人の靴直しの悴が痣になる程春中を擲られて學校へ來た、そして我々に報告して云ふのに、「僕の父が僕を捕まへて、膝紐(註、靴屋が仕事の際に膝に結ぶ紐)でひどく折檻した、が僕は臆病者ぢやないから、こんな眼にあふ程これから、もつと、悪戯してやらうと思つた。」と。

かう云ふ話を聞かされた私は「己れも一つ勇氣を見せてやらう」としかもこの同じ日の午後に決心した。母が例の時刻に、喉のかはく時の用意にと水々した梨を二つ呉れて、私を送り出した。私は學校へは行かず、しかし、胸をドキ／＼させながら、不安氣に後を覗ひ、よく偵察しながら隣の指物屋の材木小屋に這ひ込んだ、この時、指物屋の息子——私よりもズット年とつて居て、もう父の手傳ひをして働いてゐるのだが——私を勵ましてまた助力して呉れた。此日は大變暑くて、私の此の隠れ家は誠に徹臭く誠に薄暗い。私は二つの梨を永くは持つていながつた

がこれを食べる時にはまた大に良心の責苦を受けた一匹の老猫が子猫と一緒に奥の方に蹲まつてゐる、この猫は私が一寸身動きをしても、直ぐ怒つて喉を鳴らすので全く厭ではあつたが、しかし私のせめての氣晴しとなつた譯であつた。いや、罪は適面に罰を導いた、私は時計が十五分に、三十分、三十分と鳴るのを一ツ残らず數へた、その音は、けた、ましく、恰も威嚇するが如くに高い塔の上から鳴り響いた。私は果してこの小屋から見付からずに出られるかしらんと全く心配し抜いた。もう、翌日學校で手柄顔に報告するあの祝すべき凱旋の望みなどはごく束の間しか考へなかつた。既に時刻は大分遅くなつて來た。私の母が庭に出で、楽しさうに心地よさうに其邊を見廻しながら井戸に水汲みに行つた。母が恰ど私の傍を通り過ぎた！もうこれだけで私は息がとまつてしまつたのに、私の秘密を知つてゐる親友(指物屋の人)が突然母に聞いた、「クリスチアンさんは何處に居るか御存知かね」と。母はやや躊躇する様に、しかし「スザンナ先生の所さ。」と云ひ切つた。すると擲擄ひ半分に、意地わるく附け加へて「いや、いや、そうぢやない。猫の傍だろう！」と瞬

きをし横目をつかひながら私の隠れ家を教へてしまつた。あゝこの時私の氣持はどんなであつたらう！。私は怒りのために我を忘れて飛び出した。私は笑つてゐる裏切者を足で蹴つた。母は顔中一つの煽となつて水桶を片隅に置き、もう學校がひける頃なのに今からでも學校へ行けて髪を腕とを捕まへた。私は振り放した、私は地面を轉がり廻つた、私は叫んだ。喚いた。しかしすべては無駄であつた。到る所に讃め者であつたおとなしい可愛い、子がこんな惡る者である事を認めた母はひどく立腹して、私が何を云つても耳を貸さぬ、たゞ無理やりに私を引摺つた。そして私が尙も續けて反抗したがそうしたために、たゞ町の家々の窓がすべて押し開かれて見物人が澤山窓から首出したと云ふ結果になつた丈で私はどう仕様もなかつた。學校へ着いた時は丁度今退ける所であつた。生徒等は私のまはりに集つて私を罵り私を嘲つた。母の折鑑があまりに厳しいと見て取つたスザンナ先生は、私を慰めやうと試みた。この時以來、私はあの排列鞭刑(註、兩側に鞭をもつて立が裸体で通ると云ふ罰)をうける人がどんな氣持のするものであるかが解つた様ながする。